
ぼやき

森村 杏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼやき

【Nコード】

N7811T

【作者名】

森村 杏

【あらすじ】

みんなぼやきたいよね。

学校の先生も、会社の上司も、お客なんてほんっとうにわがまま。そんなぼやきを拾い上げた短編集の連載です。

dNovels様にも投稿させていただきます。

(前書き)

今回はコンビニにの店員さんになりました。

またあの夫婦が来た。

いつも一緒に来る。

こっちは仕事してるっていうのに。

なにイチヤイチャしてるんだか。

買うもん買ってさっさと出てけ。

まず、アイスを見るでしょ。

次に冷食コーナー寄ってからお酒見て。

ほら、パン見てる。

いつも買ってって飽きないのかしら。

お弁当は見たって買わないでしょ。

今日はデザート買うの？

どうせ温め物買うんでしょ。

さあ、かご持ってきたわよ。

「いらっしやませ」

目いっぱい営業スマイル。

「ポイントカードはございますか」

持ってるの知ってるけどね、決まりだから聞く。

ピッ、ピッ、ピッ、ピッっと。

バーコード読ませて袋に入れる。

「17番と50番のタバコください」

そらきた。

「こちらでよろしいですか」

一応確認してバーコードを読ます。

「それと、アメリカンドック2つください」

ほらやっぱりね。

「かしこまりました、温めてよろしいですか」

「お願いします」

電子レンジに入れて。

「先にお会計よろしいですか」

「あ、はい」

「1520円になります」

女のほうが出す。

「細かいのある？出そうか」

「大丈夫、あるから」

どっちでもいいからさっさと払ってよ。

先にアメリカンドッグ取って来たほうがいいわね。

「こちらご一緒にお入れしてよろしいですか」

「温かいのはこっちにもらう？」

「いいわよ」

「ごちゃごちゃ言っていないでさっさとしなさいよ。」

「どうぞさねますか！」

やば、強い言い方しちゃった。

「なんだよその言い方、あんたムカツクな」

「やめなさいよ」

女がとめてるけど旦那は怒ったみたい。

ちよつとやばいかな。

「何かお気に障りましたか」

「ふざけんなよ、今の言い方はなんだよ」

「申し訳ありません」

「それに、なに睨みつけてんだよ」

「そんなことありません」

やっぱりやばったかも知れない。

「やめなさいよ」

「こんな奴に馬鹿にされる覚えはないんだよ」

こんな奴ってなによ。

「馬鹿になんてしていません」

「ふざけるな、店長呼べ、店長」

あゝあ、完全に怒っちゃった。
めんどくさい。

この夫婦しょっちゅう来てるからまずかったかな。

「なにかございましたか」

やば、店長来ちゃった。

「この人、ムカツクんですけど」

「何か失礼を致しましたか」

「言い方きついし、睨まれるし、俺は客だよ」

出た、必殺の自分は客攻撃。

「私、そんなことしていません」

冗談じゃないわよ、客だからってなんなのよ。

「従業員が失礼をしたのなら、私が謝罪いたします」

店長、頭下げちゃった。

なんでよ、私が悪いみたいじゃない。

「いや、お宅にのせいじゃない、あの店員の態度が気に入らないんだよ」

「判っています、私が責任を持って理解させます」

「お宅がそう言うならしょうがない」

「ありがとうございます」

店長つたら、また頭下げてる。

「もういいでしょ、買いに来づらくなっちゃっよ」

「判ったよ」

私を睨みながら店を出て行く。

こっちこそムカツクわよ。

「またのご来店をお待ちしています」

店長は深々と頭下げてるし、怒られるのかな、でも私が悪い訳じゃない。

「塩田さん来て」

やっぱりね。

「はい」

店長に促されてバックヤードに入る。

「私、失礼なことはしていません」

先制攻撃だ。

「そうですか、では何故お客様が怒ったのでしょうか
えらい冷静ね店長。」

「判りません、虫の居所が悪かったんじゃないですか」

「塩田さんはずいぶん怖い顔をしてましたね」

「あのお客様が急に怒り始めたからです」

「いいえ、レジを打つてるときらでした」

え、ずっと見てたの。

「それは、レジのところでもたもたしてたから・・・」

「塩田さん」

おわ、店長まじ顔してる。

「はい」

「お客様に対する態度ではありません、貴方は前にもお客様を怒ら
せていますね」

「それは」

「お客様が悪いのですか」

「いえ」

さすがにやばいわね。

店長の顔、怖くて見れない。

「私たちは店員です、お客様と対等ではないんです」

「はい」

「前にも同じ事を言ったと思います」

「はい」

「理解してもらえますか」

「はい」

「ここは素直に返事するしかないでしょ。」

「反省してください」

そう言っって店長は店に戻って行く。

なんでよ、私のどこが悪いっていつもの。
お客が勝手なだけじゃない。

店長だって、私のいうこと何も聞いてくれないで、「冗談じゃないわ。」

ああ、腹が立つ。

「塩田さん、大丈夫？」

「あ、川村さん」

「店長に怒られたの？」

「そうよ、私の話を聞きもしないで」

「あのお客様、どうして急に怒ってたの？」

「レジの前でもたもたしてたから、ついきつい言い方しちゃったのよ」

「それは、失敗だったわね」

何？この女も客の見方？

「私もたまにあるわ、スーパーで買い物した時とか、お会計してるのに旦那が後から商品持って来たりとか、塩田さんはそういうの無い？」

「たまにはあるけど、タイミングだからしょうがないわよね」

「同じ事じゃない」

「何が？」

「さっきのお客様」

「違うわよ、あんなの一緒にしないでよ」

「そうかなあ、同じだと思っけど」

「川村さんもあっちの味方なんだ」

「味方とかじゃなくて、仕事って割り切ってるだけ」

「大人ね」

「お給料もらってるし、お客様とは立場が違うもの」

「客だからってええられる必要無いと思っ」

「そうかな……、そろそろ行くわ、店長に怒られちゃう」

そう言っって川村さんは店に戻った。

なによ、みんなして、本当に今日は頭に来る。
冗談じゃないわよ。

「塩田さん、今日はもういいですよ、帰ってよく考えてみてください
い」

店長に言われて私は店を出た。

ほんつとに腹立つわ。

夕飯の買い物でもしましょ。

近所のスーパーに寄って買い物をした。

レジに並んで会計の順番を待つ。

やっと順番が来た。

「お会計は1250円になります」
何？

「ちよつと高いんじゃない」

コンビにの店員なめないですよ、計算したんだから。

「お待ちください」

店員がレシートを出して金額を調べる。

「お間違いありません」

「なんでよ、これとこれが半額でしょ！」

「申し訳ございません、こちらは3割引になります」

「何いつてるの、半額のシールが・・・」

貼ってない、確かに3割引きだわ。

「私の見間違いね、でも、客に恥かかすことないじゃない」

「申し訳ございません」

「店長を呼べ」って言いけど、言えない。

自分で見間違えたんだから。

あああ、今日は何もかも駄目な日ね。

これじゃ私も嫌な客じゃない。

今日はさつさと家に帰りましょ。

これ以上嫌な思いしたくない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7811t/>

ぼやき

2011年6月3日12時10分発行